

# ミュリエル・スパークの『クルー女子大修道院長』と T. S. エリオット

松 本 真 治

## 1. 『クルー女子大修道院長』と T. S. エリオット

ミュリエル・スパークの小説はどれも短いものが多いが、『クルー女子大修道院長』(*The Abbess of Crewe*) はとりわけ短く、ペーパーバックで100頁ほどの作品である。この作品の下敷きとなっているのが、1972年に起こったウォーターゲート事件であるということと言うまでもない。ワシントン D. C. にあるウォーターゲート・ビルの民主党全国委員会本部に不審者が侵入したことからウォーターゲート事件がはじまったように、修道院への不審者の侵入からクルーの女子大修道院長選挙をめぐるスキャンダルが発覚する。修道院では、盗聴や証拠の録音テープの改ざんが行われ、出来事的にもウォーターゲート事件のパロディとなっている。また登場人物に関しても、クルーの女子大修道院長の有力候補であり、実際に選挙に勝利するアレクサンドラ (Alexandra) がニクソン大統領、腹心の二人の修道女ヴァルブルガ (Walburga) とミルドレッド (Mildred) がアーリックマンとホールデマンの両大統領補佐官、世界中を飛びまわる修道女ガートルード (Gertrude) はキッシンジャー国務長官、アレクサンドラの対立候補であったフェリシティ (Felicity) は民主党の大統領候補マクガヴァンと思しき設定となっている (Cf. Bold 99; Hynes 109; Cheyette 90; 大社 108)。しかしながら、『クルー女子大修道院長』をウォーターゲート事件というコンテキストの中だけで解釈すべきものではないことは、これまでに批評家によって指摘されていることでもある (Page 91; Cheyette 90; Stannard 408-411)。

スパーク自身は『クルー女子大修道院長』を『運転席』(*The Driver's Seat*) や『邪魔をしないで』(*Not to Disturb*) とともに詩に近い作品であると言う (McQuillan 215)。『クルー女子大修道院長』のプロットは別として、詩のように作品のイメージアリーを考えた場合、ウォーターゲート事件だけではなく、T. S. エリオットのコンテクストでこの作品を読むことができるようにも思われる。たとえば、アラン・ボールド (Alan Bold) は、『クルー女子大修道院長』には、エリオットのモダニズムとドライデンの新古典主義が共存していると指摘する (102)。また、『クルー女子大修道院長』の次の箇所を引用して、

The Abbess of Crewe's parlour glows with bright ornaments and brightest of all is a two-foot statue of the Infant of Prague. The Infant is adorned with its traditional robes, the episcopal crown and vestments embedded with such large and so many rich and gleaming jewels it would seem they could not possibly be real. (251)

ここに見られる「輝き」や「宝石」はエリオットの『荒地』(*The Waste Land*) 第二部「チェス遊び」(“A Game of Chess”) に誘発されたものであり、“Certainly Spark's abrupt changes of narrative mood, her swift transitions between everyday and exalted modes of language, her combination of ritual and romance are all reminiscent of Eliot's great poem” (102) と言う。

『クルー女子大修道院長』とエリオットとのつながりをほのめかすものとして、スパークの晩年の作品である『現実と夢』(*Reality and Dreams*) がある。『現実と夢』は、エリオットの詩「J. アルフレッド・プルーフロックの恋歌」(“The Love Song of J. Alfred Prufrock”) の冒頭の三行が引用されているように (67)、エリオットと直接的に関わりのある作品である。女子大修道院長となったアレクサンドラは親しい修道女に向かって、“The ages of the Father and of the Son are past. We have entered the age of the Holy

Ghost.” (247) と言うのであるが、この言葉は『現実と夢』にも受け継がれ、主人公トム (Tom) がとある枢機卿から聞いた話として、“the ages of the Father and the Son [are] over and we [are] approaching the age of the Holy Spirit, or as we used to say, Ghost” (59) という学説が紹介される。

女子大修道院長選の対立候補であるフェリシティを追い落とそうとするアレクサンドラー派は、フェリシティがイエズス会士トマス (Thomas) と密会していることを知っており、そのことに関して、アレクサンドラの友人である二人のイエズス会神父と共謀し、フェリシティが裁縫箱に隠し持っているラブレターをイエズス会の二人の若い修練者に盗み出させようとする。そして、盗みのために二人の修道士が女子修道院に侵入したところ、フェリシティに見つかり、警察沙汰となってスキャンダルへと発展していく。二人の神父との共謀にあたっては、アレクサンドラ自身はニクソン大統領と同じく、実質的には直接関与せず、あくまでも画策は二人の腹心の修道女、ヴァルブルガとミルドレッド、と二人の神父の四人による協議の上でのこととなっている。二人の神父が協議のために女子修道院にやって来る場面は、次のようにはじまる。

Alexandra sits in the downstairs parlour where visitors are generally received. She has laid aside the copy of *The Discourses* of Machiavelli which she has been reading while awaiting the arrival of her two clergymen friends; these are now ushered in, accompanied by Mildred and Walburga.

Splendid Alexandra rises and stands, quiet and still, while they approach. It is Walburga, on account of being the Prioress, who asks the company to be seated.

‘Father Jesuits,’ says Walburga, ‘our Sister Alexandra will speak.’

It is summer outside, and some of the old-fashioned petticoat roses that climb the walls of the Abbey look into the window at the scene, where Alexandra sits, one arm resting on the table, her head

pensively inclining towards it. The self-controlled English sun makes leafy shadows fall on this polished table and across the floor. A bee importunes at the window-pane. The parlour is cool and fresh. A working nun can be seen outside labouring along with two pails, one of them probably unnecessary; and all things keep time with the season. (276-277)

まさにこれから権謀術策がはじまるのを暗示するかのよう、二人の神父の到着を待つアレクサンドラはマキャベリの著作を読んでいる。そして二人の神父が到着し、ヴァルブルガが口火を切るのであるが、そこで急に描写は室内から室外へとすり替わる。これからただならぬ<sup>はかりごと</sup>謀が画策されようとしている室内とは対照的に、外はのどかな夏の様相を呈している。ひんやりとした室内と暖かな室外。室内の修道女とは異なり、外でバケツを運ぶ修道女はアレクサンドラたちの共謀などには思いも及ばないであろう。この室内外の描写には詩的なところが感じられるであろうし、対照的なものを並置する詩の書き方はエリオットの『1920年詩集』(Poems, 1920)によく見られるものである。『1920年詩集』には「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」(“Mr. Eliot’s Sunday Morning Service”)という詩が含まれており、この詩には墮落した教会の様子が描かれているが、その点では墮落した修道院を描く『クルー女子大修道院長』との結びつきを思わせる。また「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」にも、エリオットのいくつかの作品に登場する獣的なスウィーニー (Sweeney) がその姿を見せており、スウィーニー詩編とスパークの『運転席』や『独身者』(The Bachelors) との間テクスト性についてはすでに論じたとおりである(松本 2004, 2014)。『クルー女子大修道院長』に「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」のエコーを感じさせるのは、修道院の窓辺のあたりを飛びまわる蜜蜂の姿である。「エリオットの日曜日の朝の礼拝」には、次のような描写が見られる<sup>(1)</sup>。

Along the garden-wall the bees

With hairy bellies pass between  
The staminate and pistillate,  
Blest office of the epicene. (25-28)

そして、このエリオットの蜜蜂は、教会内の墮落した聖職者や信者と対比させられているという点に注目すれば、女子修道院の室内で密談をはじめようとしている修道女たちとは対照的なものとして描かれている室外の蜜蜂と響き合うのである。

## 2. 『クルー女子大修道院長』と「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」

「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」の基本的な構成としては、そのタイトルが示すように日曜日の朝の礼拝が行われる教会の様子が描かれる<sup>(2)</sup>。もっともエリオット氏自身が実際に姿を見せるわけではなく、エリオット氏は語り手＝礼拝の様子を眺める人という設定になっている。この詩のエピグラフとしては、クリストファー・マーロウの『マルタ島のユダヤ人』(*The Jew of Malta*)からの一節がつけられており、二人の修道士が「信心深い毛虫(“religious caterpillars”)」というように強欲な存在として罵倒されるものである。このエピグラフが示唆する通り「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」では聖職者批判がなされる。第一、二連では歴史的に批判され、聖職者が「主の利口な主保商人たち(“The sapient sutlers of the Lord”)」(2)というように、エピグラフの修道士と同じように揶揄され、またオリゲネスの名前も登場する。オリゲネスは、父なる神に対する子の従属説を唱え、原初の「言(ことば) (“the Word”)」(4, 5)を弱体化させた神学者である。第三、四連では、バプテスマのヨハネによって洗礼を受けるキリストの姿を、父なる神と精霊(＝鳩)とともに描いたウンブリア派の絵画(ロンドン、ナショナル・ギャラリー所蔵のピエロ・デラ・フランチェスカ作「キリストの洗礼」[Southam 117])について言及される。歴史的には「言」の意味が見失われてきたが、絵画の中では、三位一体、そして受肉した「言」としてのキリストが見失われずに存在し続け

ていることが示される。第五、六連では現代における教会の儀式が観察され、「黒衣の長老たち（“The sable presbyters”）」(17)と「贖罪の硬貨（“piaculative pence”）」(20)を握りしめた赤いきび面の若い悔悛者たちが登場する。この長老らはマーロウの修道士と同じく、金を集めることができればそれで十分であり、若者たちにしても、金を納めさえすれば罪が許されと思っている信者であり、いずれの側においても信仰の本質が見失われている。第七連が先に引用した四行であり、教会の外で蜜蜂が雄薬と雌薬の間を行き交う姿が描かれる。蜜蜂は蜜を集めることが本来の目的であって、その結果としての受粉は「中性のものの至福の務め」と言われるが、それに比べて詩の中に登場する聖職者は神と信者の間を取り持つのが本来の役目でありながら、その本分を忘れて金集めに奔走している。また、オリゲネスにしても「言」の解釈をすることで仲介人の役目をしているが、その学説はとうてい「至福の務め」とはなりえていない。蜜蜂は“epicene”と形容されているが、オリゲネス自身も自ら去勢しており“epicene”なのである。最終連（第八連）には、日曜の朝の礼拝に参列する代わりに浴槽に浸かっているスウィーニーが突然登場する。

Sweeney shifts from ham to ham  
Stirring the water in his bath.  
The masters of the subtle schools  
Are controversial, polymath. (29-32)

スウィーニーは、おそらく売春宿のようなところにいるのであろう<sup>(3)</sup>。その尻の動きはどことなく雄薬と雌薬を行き交う蜜蜂の動きと重なり合うが、スウィーニーが「至福の務め」を果たしているはずはない。またスウィーニーの湯をかき回す行為は、無益な神学論争とも対比されているのである。

さて、『クルー女子大修道院長』の構造が「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」の枠組みとどのように重なり合うであろうか。確かにウォーターゲート事件を下敷きにしているほどに、「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」を下敷き

にしているとは言えない。ただ、宗教にまつわる墮落と金という問題に関しては共通しているところがある。言うまでもなく『クルー女子大修道院長』に登場する女子大修道院長選挙のために陰謀をたくらむ修道女や修道士は、エリオットの墮落した聖職者に相当する。いずれの場合も、自らが墮落しているという認識がまったくないというところに重要な共通点がある。そして、とりわけアレクサンドラはオリゲネス的な存在に相当するかもしれない。オリゲネスはキリスト教とギリシア哲学を調和総合させるアレクサンドリア学派の代表的存在であり、Alexandra と Alexandrian School という名称の共鳴は単なる偶然ではないのではなかろうか。オリゲネスがキリスト教とギリシア哲学をむすびつけたように、アレクサンドラが修道院で実践していることは、聖ベネディクト（ベネディクトゥス）の戒律を遵守しながらも、修道女や修練女の訓練のために、製本や手織りではなく電子工学を教えることである。そして、修道院のスキャンダルが発覚したのち、いかに旧来の戒律と近代的な電子工学を両立させているのかを問い合わせる手紙がローマ教皇庁から送られてくることになるのだ。オリゲネスは父なる神に対する子の従属説を唱えたが、アレクサンドラは「父の時代も子の時代も過去のことよ。私たちは聖霊の時代に入ったのよ」と唱えており、オリゲネスよりもさらに原初の「言」を弱体化させているように思われる。アレクサンドラの “We are leaving the sphere of history and are about to enter that of mythology. Mythology is nothing more than history garbled; likewise history is mythology garbled and it is nothing more in all the history of man.” (300) というせりふは批評家によってよく引用されるものであるが、ここで一体歪曲させる主体は誰なのであるかと言えば、アレクサンドラ的には独裁者たる彼女自身なのであり、「精霊の時代に入った」とは神の「言」を伝えるのではなく、アレクサンドラ自身の言葉、意思を伝えることを示唆しているのであろう。実際、修道院のスキャンダルの処理にあたっては、腹心の修道女たちに “Think up your best scenarios, Sisters.” (301) と指示し、さらに続けて “They [scenarios] are an art-form [...] based on facts. A good scenario is a garble. A bad one is a bungle. They need not be plausible, only hypnotic, like all good art.” (302) と言う。アレクサンド

ラにとっては事実を歪めることは何の問題でもなく、作り話の妥当性すらも問題ではない。芸術作品のように人々を魅了すればそれでよいのである。まさにアレクサンドラは自らが神的な存在であることを自認しているのであり、その意味では自らがカルヴァンの神であるかのようにふるまう『ミス・ジーン・プロディの青春』のプロディ先生との類似性が指摘されてきたのである (Cf. Whittaker 35; Hynes 115; Walker 61; Page 90; Cheyette 91)。

アレクサンドラ一派以外の修道女に関してはどうか。アレクサンドラの対立候補であるフェリシティは、愛と自由を標榜し、“Love [...] and love-making are very liberating experiences, very. If I were the Abbess of Crewe, we should have a love-Abbey. I would destroy that ungodly electronics laboratory and install a love-nest right in the heart of this Abbey, right in the heart of England.” (268) と他の修道女たちに訴えて選挙に臨むのであるが、このフェリシティの説にも行き過ぎがあることはあらためて説明する必要もないだろう。ただこのようなフェリシティでありながらも、アレクサンドラに自分が選挙に敗れるのではないかと思わせるほど、フェリシティは若い修道女たちの支持を得ており、その意味ではフェリシティに賛同する修道女たちもやはり同じ穴の<sup>むじな</sup>貉でしかない。また、“These are all the nuns in the convent, with the exception of kitchen nuns and the novices who do not count and the senior nuns who do. A less edifying crowd of human life it would be difficult to find; either they have become so or they always were so; at any rate, they are in fact a very poor lot, all the more since they do not think so for a moment.” (275) と言われるように、語り手の修道女に対する評価はそもそも低いものなのであり、シニアの修道女であるアレクサンドラが自らの傲慢さを意識していないように、一般の修道女も自らの哀れさに一瞬たりとも思いをはせることはないのである。

「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」には現在の教会の一場面として悔悛のために金を渡す儀式が描かれているが、『クルー女子大修道院長』でも金にまつわるあやしげなことが行われる。アレクサンドラの腹心の修道女と共謀しているイエズス会の二人の神父ボードアン (Baudouin) とマクシミリアン



(Maximilian) は、二人の若い修練者グレゴリー (Gregory) とアンブローズ (Ambrose) をフェリシティのラブレターを盗むために女子修道院に忍び込ませることにする。実際にラブレターを盗むために侵入する前日にも、グレゴリーとアンブローズの二人は現場を確認するために女子修道院に忍び込み、フェリシティの指ぬきだけを盗む。その結果としてフェリシティに用心させることとなり、盗みの当日フェリシティに侵入したところを発見され、警察に通報されることになる。しかしながら、結局は指ぬきを盗んだだけのことであり、また修道院内で起こった出来事ということもあって、二人の修練者は警察から警告を受けただけで刑事事件としては終結する。その後、ボードアンとマクシミリアンの二人の神父はアレクサンドラに対して口止め料の金を要求する。一回目は女装した修練者の一人が、百貨店セルフリッジズ (Selfridge's) の女子トイレでアレクサンドラの使い走りであるウィニフリード (Winifrede) から受け取る。二回目は大英博物館の男子トイレで受け取りを試みるが、男装したウィニフリードが警備員とトイレの係員に捕まり、数千ポンドの入ったビニール袋を抱えたまま警察に引き渡されることになる。「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」では金を受け取るのが「黒衣の長老たち」となっているが、『クルー女子大修道院長』では金を渡す側の修道女たちが、女子大修道院長になったアレクサンドラを除き黒い衣を身につけている (女子大修道院長は白い衣)。金を受け取る側の修道士たちであるが、若い修練者のグレゴリーとアンブローズは、女子修道院への侵入が見つかったのちに修道会から追放されている。そして、マクシミリアン神父とボードアン神父は、二回目の金の受け渡しが失敗したのちイギリスを離れてアメリカへ渡り、それぞれ教会劇の運営、悪魔学 (demonology) のセミナーを開いており、聖職を離れ世俗の世界に戻っているのだ。

エリオットは教会の墮落した聖職者を描く一方で、バプテスマのヨハネによって洗礼を受けるキリストの姿を描いた絵画について言及し、三位一体、原初の「言」の存在をほのめかす。スパークは修道院の墮落した修道女を描く一方で、たびたび言及しているのがプラハの幼児イエス像である。修道院の面会室に置かれている高さ2フィートのこの像には実は盗聴器が仕掛けられており、

面会室でのやり取りはすべて記録されるようになっている。このプラハの幼児イエス像であるが、それは〈盗聴〉を象徴するだけではないようである。すでに引用したように、この像は多くの宝石で飾られているが、その宝石は修道女の持参金によるものである。アレクサンドラがこの幼児イエス像に手を触れることがあるが、“The Abbess reaches out to the Infant of Prague and touches with the tip of her finger a ruby embedded in its vestments.” (254) というように、この幼児イエス像に頼るそぶりをみせるのは、盗聴装置の役割に加えて、その像の金銭的な価値にも意味を見出しているのかもしれない。実際、ボードアンとマクシミリアン両神父に二度目の口止め料を用意するときに、アレクサンドラは幼児イエス像のまわっているローブからエメラルドを一つはずしてウィニフリードに手渡し、質屋に持って行くように指示する。また、ローマへ弁明に赴くときには、アレクサンドラはこの像を銀行に預けて行く。プラハの幼児イエス像は、エリオットの詩に見られた絵画「キリストの洗礼」と同じように、父と子と精霊の三位一体、原初の「言」が現在でも失われていないことを厳然と読者に示す一方で、アレクサンドラにはその本来の意味が見失われていることを対照的に浮き彫りにする役目を果たしているのである。受肉した子としての意味を見失っているのであれば、まさにその意味ではアレクサンドラにとっては「子の時代」は終わっているのだ。

「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」に姿を見せるスウィーニーは教会の外にいて風呂の湯を尻でかき回しているのであるが、その役割を『クルー女子大修道院長』において担っていると思われるのは、修道女フェリシティである。スウィーニーはエリオットのコンテクストにおいては肉欲や獣性の象徴と解釈されるが、『クルー女子大修道院長』において肉欲と結びつくのは修道女でありながらイエズス会士トマスと関係を持っているフェリシティである。結局のところ、女子大修道院長選挙はニクソン大統領の場合と同様に、アレクサンドラの圧倒的勝利に終わるのだが、その後フェリシティは修道院を去り（アレクサンドラに言わせれば「破門（“excommunicated”）」[296]）、ロンドンのアールズコート小さなアパートでトマスと暮らしはじめる。そして、フェリシティは女子修道院のスキャンダルを世間に公表し、アレクサンドラらを困らせ

る。「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」では、聖職者が神学論争をして原初の「言」の意味をかき回すことと、スウィーニーが浴槽の湯をかき回すことが並置されているが、同様にフェリシティもスキャンダルを暴露することで、アレクサンドラらをかき回しているのだ。アレクサンドラらにとって本当に厄介な存在は警察ではなく、マスコミやローマの司教であり、そのための対策を練る。二人のイエズス会修練者による女子修道院への侵入事件に関して、アレクサンドラらは事実を歪め、次のようなシナリオを考え出す。

Mildred says, 'It was like this. The two young Jesuits, who have now been expelled from the Order, hearing that there was a nun who —'

'That was Felicity,' says the Abbess.

'It was Felicity,' Walburga says.

'Yes. A nun who was practising sexual rites, or let us even say obsequies, in the convent grounds and preaching her joyless practices within the convent ... Well, they hear of this nun, and they break into the convent on the chance that Felicity, and maybe one of her friends —'

'Let's say Bathildis,' Walburga says, considering well, with her mind all ears.

'Yes, of course, Felicity and Bathildis, that they might have a romp with those boys.'

'In fact,' says the Abbess, 'they do have a romp.'

'And the students take away the thimble —'

'As a keepsake?' says the Abbess.

'Could it be a sexual symbol?' ventures Mildred. (294-295)

事の顛末としては、フェリシティは女子修道院内で「性的儀式」を実践しており、それを聞きつけた二人の修練者が女子修道院に忍び込み、あわよくばとい

うような話へと作り変えられていく。そもそも事件の発端となったフェリシティの指ぬきでさえ、修道院のスキャンダルの象徴ではなく、「性的な象徴」へとすり替えられてしまい、フェリシティとその「性的儀式」にまつわる新たなスキャンダルへと全体像を塗り替えようとするのである。

『クルー女子大修道院長』の中で忘れてはいけない人物が、世界中を飛び回るガートルードであろう。キッシンジャー国務長官に相当する人物と言われ、実際にその声もキッシンジャーに似た設定となっており、気管支炎を患っているのではないかとアレクサンドラが心配するようなハスキーな声の持ち主である (Bold 100)。「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」にはガートルードに相当する人物は登場しないが、ガートルードは雄薬と雌薬の間を行き交う蜜蜂の役割を担っているように思われる。エリオットの詩では蜜蜂は “the bees” と複数形になっているが、スパークの小説では “a bee” と単数形になっており、ガートルード一人とむすびつく。エリオットの蜜蜂は “epicene” と形容されているとはすでに述べたが、ガートルードについては、“‘Gertrude should have been a man,’ says Walburga. ‘With her moustache, you can see that.’ / ‘Bursting with male hormones,’ the Abbess says [...]” (256) と言われるようにその男っぽさが強調されており、その意味ではガートルードも “epicene” な存在であるのだ。世界中を飛び回る姿は、雄薬と雌薬の間を行き交う姿と重なり合うであろう。そしてエリオットの蜜蜂が仲介役として受粉という「至福の務め」を果たしているのと同様、ガートルードも世界中で偉業を成し遂げており、たとえばアンデス山脈の地図にもない場所では、仲介役として人食い人種と菜食主義者の交渉にあたったのである。ガートルードの偉業は世間だけではなくアレクサンドラも認めるところであり、実際はガートルードが自らの意思で修道院から世界へと出て行ったにもかかわらず、アレクサンドラは修道院がガートルードを世界へ派遣したという呈にすり替えるのである。しかしながら、周囲の反応とは関係なく、エリオットの蜜蜂と同様にガートルードは自らの偉業に関して特に意識している様子を微塵たりとも見せない。ガートルードは性別的には中性のような外見であるが、内面的にもきわめて中立である。アレクサンドラとフェリシティの両者から助けを求められ、いずれに

対しても当を得たアドバイスを与えるが、いずれの側に味方することもなく、常に事の善悪を的確に判断し中立の立場を崩すことはない。たとえばアレクサンドラは保身のために、50人のすべての修道女に罪を告白する文書に署名させ、それをローマへ持って行くとガートルードに伝える。それを聞いたガートルードは次のように怒りを露わにし、アレクサンドラらを公然と非難するのだ。

‘I am outraged,’ says Gertrude, ‘to hear you have all been sinning away there in Crewe, and exceedingly at that, not only in thought and deed but also in word. I have been toiling and spinning while, if that sensational text is to be believed, you have been considering the lilies and sinning exceedingly. You are all at fault, all of you, most grievously at fault.’ (314)

『クルー女子大修道院長』と「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」が構造的に類似していることは、上述のように確認することができた。最後に両作品のエンディングについて見ておきたい。すでに引用したが、「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」の最終連では、教会のその外に位置するスウィーニーが唐突に姿を現し、神学論争好きな聖職者と並置されることになる。『クルー女子大修道院長』のエンディングは、船に乗ってローマへと旅立つアレクサンドラを次のように詩的に表現している。

Our revels now are ended. Be still, be watchful. She sails indeed on the fine day of her desire into waters exceptionally smooth, and stands on the upper deck, straight as a white ship’s funnel, marvelling how the wide sea billows from shore to shore like that cornfield of sublimity which never should be reaped nor was ever sown, orient and immortal wheat. (315)

ここで語り手がアレクサンドラのその後の運命をどのように考えているのかは、

明確にされていない。代表作である『ミス・ジーン・プロディの青春』や『運転席』の例を見てもわかるように、エンディングにおいて何らかの価値判断をすることをあえて避けるところがスパークの小説の特徴でもある。ウォーターゲート事件に重ね合わせれば、大統領選に勝利したものの、結局は辞任に追い込まれたニクソンと同じ運命がアレクサンドラを待ち受けているのかもしれない。ガートルードがアレクサンドラに対して ““Well [...] you may have the public mythology of the press and television, but you won’t get the mythological approach from Rome. In Rome, they deal with realities.”” (313) と忠告するように、マスコミは騙すことができてローマ教皇庁に対してはそうはいかず、アレクサンドラ自身も ““It’s quite absurd that I have been delated to Rome with a view to excommunication, [...] and of course, Gertrude, dear, I am going there myself to plead my cause. [...]”” (313) と危惧しているように「破門」という結末も十分予見できる。しかしながら、その結末はあくまでも読者の空想の中だけのことであり、語り手が確かに裏書してくれているわけではない。たとえば、ノーマン・ページ (Norman Page) は、アレクサンドラがローマでの審問を切り抜けることができないと想像する理由はなさそうであると解釈している (91)。ローマへ向かう船上の自信に満ちたアレクサンドラの姿だけを取り上げれば、ページの解釈へとつながるであろう。ルース・ホイッタカー (Ruth Whittaker) は最後のパラグラフではアレクサンドラへの支持が与えられ、さらには小説全体を通してのアレクサンドラの行動自体をも暗に是認しているのだという読みを示している (104)。同様に、小説の語り手はアレクサンドラを批判しているのではなく、反対に支持しているのだとジョゼフ・ハインズ (Joseph Hynes 118) やブライアン・チェイエット (Bryan Cheyette 88) らも言う。破門か生き残りかのいずれかに固定させてしまうのではなく、両者の可能性を担保するような表現にすることがスパークの意図なのであろう。ガートルードの重みのある言葉に対して、エンディングでのアレクサンドラの詩的描写を対峙させることでバランスを保っているのだ。ホイッタカーは『クルー女子大修道院長』には「風刺の教訓的な重み (“the didactic weight of satire”）」 (103) が欠けていると言うが、それは

アレクサンドラがニクソンの轍を踏むかどうかを明確にさせない描き方をしていることとも関連しているであろう。

価値判断をあえて避けるということは、「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」にもあてはまることである。スウィーニーと聖職者のいずれが神に近いのかということを判断するのではなく、いずれもが神から遠く隔たっているという状態を示すことに意味がある。しかしながら、一連のスウィーニー詩編を読むと、未完の詩劇『闘技士スウィーニー』(*Sweeney Agonistes*)の執筆を最終的に断念してしまうまでは、エリオットはスウィーニーの力に魅せられていた感が否めない。批判の対象である神学論争好きの聖職者と同列に並べることで、逆説的にスウィーニーを密かに是認しようとしているとも解釈できる。そう考えれば、「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」と『クルー女子大修道院長』のエンディングにも共通項が見出せる。エリオットはスウィーニーの精力溢れる姿を見せることで、スパークはアレクサンドラの意気揚々とした姿を見せることでそれぞれの作品を締めくくっている。スウィーニーとフェリシティ、オリゲネスとアレクサンドラという対応関係を思い起こせば、『クルー女子大修道院長』のエンディングに登場する人物としては、エリオットが選んだのとは対極の人物が選ばれているわけであり、最後の最後でスパークはエリオットを逆手に取っているようである。『クルー女子大修道院長』はウォーターゲート事件のみならず、「エリオット氏の日曜日の朝の礼拝」の枠組みを受け継ぎながら、エリオットとは一味異なる作品として成り立っていると解釈することもできよう。

## 注

- (1) 引用は *The Complete Poems and Plays* からのものである。
- (2) 詳細については拙論「スウィーニーと教会——『エリオット氏の日曜日の朝の礼拝』——」を参照。
- (3) “Sweeney Erect” および “Sweeney Among the Nightingales” を参照。

## 引用文献

Bold, Alan. *Muriel Spark*. London: Methuen, 1986.

Cheyette, Bryan. *Muriel Spark*. Tavistock, Devon: Northcote, 2000.

- Eliot, T. S. *The Complete Poems and Plays*. London: Faber, 1969.
- Hynes, Joseph. *The Art of the Real: Muriel Spark's Novels*. London: Associated UP, 1988.
- Page, Norman. *Muriel Spark*. London: Macmillan, 1990.
- McQuillan, Martin. “‘The Same Informed Air’: An Interview with Muriel Spark.” *Theorizing Muriel Spark: Gender, Race, Deconstruction*. Ed. McQuillan. Basingstoke, Hampshire: Palgrave, 2002. 210-229.
- Southam, B. C. *A Student's Guide to the Selected Poems of T. S. Eliot*. 6th ed. London: Faber, 1994.
- Spark, Muriel. *The Abbess of Crewe*. 1974. *Muriel Spark Omnibus 2*. London: Constable, 1994. 243-315.
- . *Reality and Dreams*. 1996. London: Penguin, 1997.
- Stannard, Martin. *Muriel Spark: The Biography*. London: Weidenfeld and Nicolson, 2009.
- Walker, Dorothea. *Muriel Spark*. Boston: Twayne, 1988.
- Whittaker, Ruth. *The Faith and Fiction of Muriel Spark*. London: Macmillan, 1982.
- 大社淑子『ミューリエル・スパークを読む』 水声社 2013年
- 松本真治「スウィーニーと教会——『エリオット氏の日曜日の朝の礼拝』——」  
『文学と評論』第2集第10号 文学と評論社 1993年 75-85頁
- 「T. S. エリオットとミューリエル・スパーク——女を殺す理由と女が殺される理由」『ポッサムに贈る13のトリビュート——T. S. エリオット論集』池田栄一他編 英潮社 2004年 296-322頁
- 「ミューリエル・スパークの『独身者』とT. S. エリオット」『英文学論集』第21号 佛教大学英文学会 2014年 17-34頁